

憲法九条の会・岩岡 ニュース 第102号

2016・4・8発行

発行人 堀口照美／編集人 白井篤子

沖縄で今、何が起きているのか？ お話と映画のつどいを開きます

会員の南輝子さんの友人、玉城洋子さんがはるばる沖縄から来て下さり、最新の沖縄情勢についてお話し下します。会員の皆さん、ぜひご参加下さい。当日のスケジュールは次号でお知らせします。

と き:2016年5月20日(金)13:30～

ところ:岩岡連絡所多目的ホール(大)

お 話:玉城洋子さん (沖縄在住の歌人)



《プロフィール》

1944 (昭和19)年9月生まれ

1967年3月 琉球大学国語国文科卒業

1967年4月 県立浦添高校国語教師として赴任。以降38年間勤務

1982年 紅短歌会発足

2002年 歌誌「くれない」発行 (3月号で通巻165号)

著書 歌集『花染手巾』他4歌集

教科書 『琉歌・方言』

玉城洋子さん

『沖縄の文学』(共著) 高等学校国語副読本 (古典編、現代・近代編)

*裏に玉城洋子さんの「国の明日を疑う」を掲載しています。「歌のひびき」(九条歌人の会会報) No.16 2016.3.1 発行より)

戦争法廃止から安倍政権打倒へー国民総がかり運動の発展ー

4月2日(土)午後、「安保法制(戦争法)廃止・総がかり行動明石」の集会在大久保の産業交流センター多目的ホールで行われました。上記のタイトルで、二宮厚美・神戸大学名誉教授の講演がありました。要旨を2回に分けて紹介します。

花よりアンボ

今日は絶好の花見日和ですが、花よりアンボというわけで、安保の学習会に参加された皆さんに敬服しております。今日は総がかり運動がどういう局面を迎えているのか、このことを中心にお話ししたいと思います。

総がかり運動は安倍政権を追い詰めている

総がかり運動というのが、このおよそ1年の間に大変大きな力を発揮して、現局面は明らかに安倍政権は危機に直面している、つまり政権そのものが危ういところまで総がかり運動は安倍政権を追い詰めているというのが現在の特徴であろうと思います。

安倍政権の起死回生策一衆参同日選挙のプラン

参議院選挙まで今の状況が続くと、まず100%確実に与野党の逆転が起きます。参議院の一人区を中心にして野党の選挙協力が進むと、恐らく野党の側が勝利して、ねじれ国会が発生する可能性がまことに強くなる。これは今年の初めごろまではちょっと危ういかなという状況だったんですが、2、3月この2ヶ月ばかりの運動で、ずいぶん選挙協力の形態も発展して、共産党の側が柔軟に対応したので、民主党は最初は及び腰だったんですが、結局選挙協力に乗らざるを得ないと、これを市民連合が、総がかり運動の主力部隊であります、国民の声を代弁して応援する、これが日々高まっておりますから、選挙協力は完璧に進行する見通しになってきました。

このままいくと7月に大変動が起こるのではないかとという状況に直面した安倍政権がとった作戦が“一步前進、二歩後退”。一步前進というのは今までと同じように改憲をやるぞということによってどんどん前へ進んでくる、一步前進したわけですよ、今年。ところがこのままいくと、参議院選挙を通じて大きな壁



にぶつかって、前進勝利できるどころか、反撃にあって負けるかもしれないという局面に至ったんですね。ひょっとしたら政権交代につながる可能性がある。この2月から3月までの間、わずか2ヶ月ばかりの間でそういうことが起こったんですね。そこで2歩後退する。なぜ2歩も後退するかというと、ちょっと出過ぎて国民の反撃にあいそうだと、いうわけで、一歩ではなくて二歩後退するわけです。攻撃していた手をゆるめるわけですから、国民の側も「ほう、ちょっと引いたな」と。引いて安倍政権はどうしようとしているか。今、衆議院選挙をやった場合には、民進党の保守派は共産党と一緒にやるなんて絶対あり得ないという対応をしているから、衆参同日選挙に持ち込んだならば、野党が団結して安倍政権に取って代わろうとはなっていない、参議院の一人区では協力するかもしれないが、政権をかけた衆議院選挙ではバラバラじゃないか、こんなバラバラな政党に政権を委ねることはできないという動きが出てきますね。そこで安倍政権が勝利すれば、あとは一気に明文の憲法改正へ。しかも来年4月の消費税増税は先送りということにすれば「それはそれで結構じゃないの」ということになり、国民の中で混乱が生じますね。「景気が悪くなりそうだから、消費税増税は先送りした方がいいんでないの」ということをアメリカから研究者を呼んで言わせて、国民の反応を見る。これは恐らく菅官房長官の悪知恵でしょう。あの男が相当根回しをしながら作戦を立てて、“一歩前進、二歩後退”の新たな戦術を弄しようとしている、これが現在の局面です。

騙されてはいけない。総がかり運動がこれまでやってきたように、戦争法の廃止、立憲主義の回復、この一点にかけて選挙戦を闘うことです。(つづく)

催し物の案内

『戦場ぬ止み』
 (いくさばぬとう
 どうみ) 上映会
 とき：4月23日
 (土) 10:00
 13:30
 17:30
 午後3時45分から60分、三上智恵監督のお話
 ところ：アスパシア明石子午線ホール
 前売り券
 1,000円

第98回世話人会

とき：4月15日(金)
 13:30～
 ところ：岩岡連絡所多目的ホール(小)
 第10回総会、「お話と映画のつどい」について詳細を決めます。5月3日の憲法集会成功に向けて話合います。どなたでもご参加下さい。

国の明日を疑う

玉城 洋子 (紅)

日本復帰前の1965年、大学在学中の修学旅行でパスポートを持って初めて、本土の土を踏んだ。鹿児島山川港で船を降り旅館の水が軟水で、なかなか石鹸の泡を落とす事が出来ずにいた。沖縄の硬水とは違う爽やかな感触が、本土という地の初印象だった。東京観光のバスガイドさんは、自己紹介が済むと「皆さんも主食はやっぱり米ですか」と優しく尋ねたが、この無知は誰のせいなのかと悲しんだ。本土を訪れて何度目だったか。教師となって出かけた本土研修会は復帰二年目。本土に追いつけ追いつけと学力に力を入れていた。その会場で私達への質問は「沖縄にはまだ現地人が住んでいるのですか」。私が答えに戸惑っていると先輩教師がすかさず言った。「私たちが現地人です」と。貧しかった「芋と裸足」の話になるはずだったが、それ以上は会話にも論議にもならなかった。あれから半世紀が経ち、沖縄はアメリカ世から大和の世に変わり、生活は豊かになった。しかし復帰の際、本土防衛の為に犠牲となった凄惨な沖縄戦を、決して繰り返すな、命ど宝と約束した「米軍基地撤去」が未だ果たされないまま七十余年。日米安保の荷を国

土・6%の島に74%の米軍基地を負わされている。
 二十年間も抗議を続ける「辺野古新基地」に、正念場の昨年、抵抗するなら法廷に出ろと沖縄県知事を提訴した国。平成もまた琉球処分の執行なのかとやりきれない思いである。
 日本国憲法が全く適用されず、人権が無視された米軍占領下の二十七年間があった。敗戦間もない五歳の頃、朝鮮戦争があつて故里の小さな村でも米軍の実弾演習があり、側溝に隠れた。間もなくベトナム戦争が激しくなつて、米兵達が嘉手納飛行場から出撃して行ったが、明日の身も知らない兵士達に小さな少女を犯す暴行事件が頻発した。故郷石川市の写真屋の娘、永山由美子ちゃんが自宅の前から連れ去られ、米兵に暴行されて死んだ。青信号を渡っていた那覇市立上山中学校二年生の国場君、糸満市に住む主婦が轢殺された。隣の人達が、米兵に犯されていく。県民の怒りはコザ暴動となって爆発し、米軍の車輜七十台余を焼き尽くす事件となった。
 憲法九条を崩してでも、米国に従い戦争に突き進みたい日本国の明日を疑う。

